

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 401 号 平成 24 年 9 月 26 日

不気味の谷

「不気味の谷」というのは、東京工業大学の名誉教授でロボット工学の専門家である森政弘先生が1970年に提唱した仮説です。

以前の人型ロボットは動きもぎこちなく、如何にもロボットという感じでしたが、最近は研究も進んできており、動きや表情が本物の人間に近づきつつあります。

森先生の説によると、この人型ロボットについて、人間に近づいていく過程では好感を覚えるけれど、ある時点で突然嫌悪感に変わる。しかし、外観や動作が本物の人間と見分けがつかない程になると再びより強い好感を覚えるようになる、というもので、好感度が高い状況から嫌悪感を持つようになり、再び好感度が増すという変化を、グラフの変化になぞらえて「不気味の谷」と名付けています。

つまり、中途半端に似ている、その微妙な感じというのは、見る人に不安感や不快感を与えるという事だと思います。

そうした感性は、大人だけではなく、赤ちゃんにもちゃんとあるという事が、理化学研究所や東京大学、京都大学の研究者のグループの実験によって明らかとなりました（9月13日付朝日新聞）。

赤ちゃんは、半年も過ぎると母親と他人とを区別して認識する事ができるようになりますが、これまでの研究から、親しみのある母親の顔だけでなく、他人の顔も目新しさから好んで興味を示すことが分かっています。

今回の実験は、そうした赤ちゃんの特徴をいかし、生後7～12カ月の赤ちゃん51人に、「お母さん」と「赤の他人」、双方をコンピューターで50%ずつ合成した「半分お母さん」の顔を見せて反応を見るというものです。

その結果、7、8カ月の赤ちゃんは3つを均等に見ましたが、より発達した9～12カ月の赤ちゃんは「半分お母さん」だけを見なかったという事です。

これについて、理化学研究所の松田研究員は、「慣れ親しんでいる母親と思った顔が、実はお母さんではないと気づいたことで、裏切られたような感情が起きたと考えられる」と分析しています（9月13日付朝日新聞）。

新聞で紹介された3つの写真を見比べると、「お母さん」と「赤の他人」ははっきりと違いが分かりますが、「半分お母さん」は実に微妙です。その「お母さん」にそっくりだけれど微妙に違う、その「変に似ている」というところが、赤ちゃんには

目を背けたくなる程に不安を与えるのかも知れません。

見方を変えれば、1歳にも満たない赤ちゃんでも、本物の「お母さん」と「半分お母さん」との微細な違いをしっかりと見分ける力が備わっているという事で、赤ちゃんの認識力を決して侮ってはいけないということです。

赤ちゃんは「お母さん」の顔にも「赤の他人」の顔にも興味を示しますが、その反応には、実は「お母さん」には「親近感」から、「赤の他人」には「目新しさ」からという違いがあるといわれています。

その意味では、赤ちゃんの反応から、その子との距離感（親密度）が分かるかも知れません。

普段、全く面倒を見ない父親が、たまたま赤ちゃんを見たらすごく喜んだからといって、「俺は父親だからな」と安心してはいけません。もしかしたらそれは、物珍しさからの反応に過ぎないのかも知れないのですから。（塾頭：吉田 洋一）